

近江米 情 報

第53巻
第4号
(通巻264号)
令和5年
01
(2023年)

発行 / 近江米振興協会

編集責任者 / 小久保 泰

- 巻頭：会長新年あいさつ
- 近江米新品種の紹介
- 令和5年度近江米生産基本方針

大津市松本一丁目 2-20 滋賀県農業教育情報センター内
TEL(077)523-3920 FAX(077)523-5611
ホームページ <http://www.ohmimai.jp/>
E-mail : shiga@ohmimai.jp

安全・安心、
美味しいお米は
近江米。



冬の琵琶湖

令和5年の年頭にあたって



近江米振興協会 会長
滋賀県知事 三日月 大造

あけましておめでとうございます。

皆様には、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年7月に、本県の「森・里・湖（うみ）に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」が世界農業遺産に認定されました。千年以上に渡って先人から受け継ぎ、農業者・漁業者をはじめとする地域の皆様が取り組んできた琵琶湖と共生する農林水産業「琵琶湖システム」が、世界に認められたものです。

今後は、「世界農業遺産」認定を広く国内外に発信し、県産農林水産物のブランド化や地域資源を生かした観光産業の推進など、力強い農林水産業づくりや地域活性化を図るとともに、関係者の皆様とともに「琵琶湖システム」を次の世代へ引き継いでまいりたいと思いますので、引き続き、お力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、振り返ってみると、昨年の稻作も気候変動の影響を受ける年でありました。7月中旬は日照時間が少なく、降水量が多かったため、稻の草丈が平年より長くなり、降雨等で倒伏するほ場が散見されました。一方、稻の収量・品質に影響を及ぼす幼穂形成期や出穂期は天候に恵まれ、穂数や粒数が平年より多くなり、登熟も進んだ結果、令和4年産米の本県の作況指数は、「平年並み」の「100」となりました。

全国の作況指数は「平年並み」の「100」、主食用米の生産量は670万トンとなり、国が示す適正生産量675万トンを下回ったため、主食用米の需給はやや均衡し、令和4年産米の価格は、令和3年産米よりもわずかに上昇したところです。

昨今の世界情勢の劇的な変化等により、農業資材や原油価格等は高騰し、生産コストが上昇する等、農業者を取り巻く環境は一層厳しさを増しております。

人口減少やコロナ禍等により主食用米の需要が大きく減少している中、農業者の所得向上や需要に応じた生産を図るために、より一層マーケットインを意識した米作りが重要となります。

そのような中、国の「みどりの食料システム戦略」や「滋賀県環境こだわり農業推進基本計画」の改定等を踏まえ、本県では、気候変動下で生産が安定し、オーガニック栽培にも適し、良食味の中生品種を育成してまいりました。いよいよ、本年2月末には新品種の名称が決定し、令和5年度は一般栽培による生産を60haまで拡大する等、プレデビュ一年に向けた準備を進めています。

新たな需要を開拓する品種として期待しており、本県の主要品種である「コシヒカリ」や「みずかがみ」、環境こだわり米等特色のある米として、実需者から求められる、また、消費者に買っていただけるよう、しっかりと生産・供給し、全国における近江米の需要量シェアが維持・向上するよう、関係者が一丸となって取組を進めてまいります。

物価高騰等により、小麦製品をはじめとする食品が値上がりする中、米への注目が高まっていることから、この機会をチャンスと捉え、昨年、地理的表示（GI）に指定・登録された『「滋賀」（清酒）』『近江日野産日野菜』と併せ、近江米等をはじめとする農産物の魅力を発信し、関係者の皆さんと滋賀県農業を盛り上げていきたいと考えております。

引き続き、皆様の御支援、御協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

本年が皆様にとって輝かしい一年となりますことをお祈りいたします。

みらいにつなぐ近江米新品種「滋賀83号」について

農業技術振興センター
栽培研究部

～はじめに～

「日本晴」や「秋の詩」をはじめとする水稻の中生熟期の品種では、出穗期以降の台風や長雨への遭遇、高温登熟の影響によって収量や品質が低下するケースが増えています。そこで、農業技術振興センターは食味、収量性、玄米外観品質のほか、耐倒伏性や高温登熟性にも優れ、様々な気象条件でも安定して栽培をしやすい中生熟期の新品種「滋賀83号」を育成しました。

「滋賀83号」は、みらいの近江米の主力品種となるべく令和6年度の本格デビューに向け、令和5年度はプレデビューとして県内で約60haの作付けが予定されています。そして、米市場で存在感を高めるため、栽培方法を環境こだわり栽培基準よりさらに厳しい「化学肥料や殺虫・殺菌剤（化学合成農薬）を使用しない栽培」や「オーガニック栽培」に限定します。

本稿ではこの品種への理解を深めていただくために、その特性について概説します。

～「滋賀83号」の来歴～

「滋賀83号」は「にこまる」を母、「滋賀69号」を父とした人工交配を行って得た後代から育成しました（図1）。「にこまる」は極良食味で高温登熟性に優れるとされる品種です。「滋賀69号」は「秋の詩」や「ゆめおうみ」の血を引き継ぐ極良食味でかつ短稈で倒伏に強く栽培しやすい系統です。この両者の長所を合わせもつことを目指して育成しました。

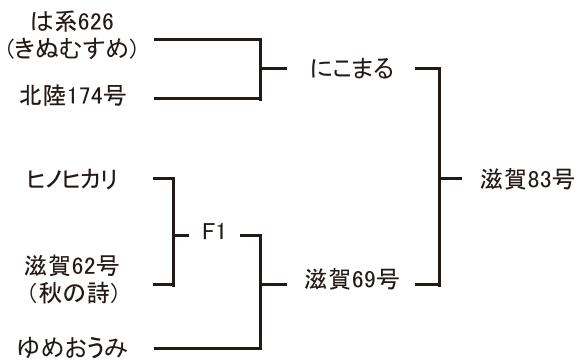


図1 系譜図

～「滋賀83号」の特性～

「滋賀83号」の特性概要は以下のとおりです。成熟期は「日本晴」より2日遅いですが、「秋の詩」より4日早く、中生の晚熟期に属します（表1）。

稈長は「日本晴」より10cm、「秋の詩」より21cm短く、稈質も剛いことから耐倒伏性に優れます（表1, 図2）。

収量性は「日本晴」、「秋の詩」より優れます。玄米の千粒重は「日本晴」より大きく、「秋の詩」と同等です。玄米の形状は「日本晴」、「秋の詩」よりやや細長く、玄米表面の縦溝がやや目立つものの、色沢は飴色で光沢は優れます。高温登熟であっても白未熟粒は生じにくいくことから、玄米外観品質は優れます（表1, 図3）。

食味について官能試験による総合評価では「日本晴」、「秋の詩」よりも優れます。食味に関するタンパク質やアミロースの含量は「日本晴」より低く、「秋の詩」と同等です。味度は「秋の詩」、「日本晴」よりも優れます（表1）。

葉いもちほ場抵抗性は「秋の詩」より優れ、「日本晴」と同等の“中”、穂いもちほ場抵抗性は「秋の詩」より優れるものの、「日本晴」よりやや劣る“やや弱”です。なお、いもち病真性抵抗性遺伝子型はPiaおよびPiiであると推定されます。

縞葉枯病に対しては既知の抵抗性遺伝子を保有せず罹病性です。

～「滋賀83号」の栽培上の留意点～

「滋賀83号」は移植後の初期生育が比較的旺盛で分けつを確保しやすい一方で、初期生育が旺盛過ぎると穗肥時期である幼穂形成期に至るまでに栄養不足となり葉色が極端に低下する場合があります。したがって、初期生育が旺盛になり過ぎないよう基肥の過剰施肥を避けつつ、6月後半～7月前半にかけて葉色が極端に低下しないよう、場合によっては追肥が必要です。

表1 特性概要

	滋賀83号	標)日本晴	比)秋の詩
熟期	中生の晩	中生の晩	中生の晩
出穂期(月・日)	8.09	8.08	8.13
成熟期(月・日)	9.17	9.15	9.21
稈長(cm)	73	83	94
穗長(cm)	20.5	20.4	20.6
穂数(本/m ²)	389	386	372
倒伏程度(0~5)	0.1	0.4	1.4
精玄米重(kg/a) ²⁾	61.1	56.5	57.7
同上比率(%)	108	100	102
玄米千粒重(g)	22.8	22.4	22.6
玄米外観品質(1~9) ³⁾	4.0	5.0	4.6
食味官能試験 総合評価 ⁴⁾	0.10	-0.55	-0.21
玄米タンパク質含量(%) ⁵⁾	6.28	6.66	6.26
アミロース含量(%) ⁶⁾	17.7	18.7	17.3
味度 ⁷⁾	79.7	70.5	76.3
耐倒伏性	強	やや強	やや弱
穂発芽性	やや難	中	やや難
葉いもち病抵抗性	中	中	弱
穂いもち病抵抗性	やや弱	中	弱
縞葉枯病抵抗性	罹病性	罹病性	罹病性
高温登熟性	やや強	やや弱	やや弱

1)2015年～2022年 奨励品種決定調査施肥区(5月10日頃植、基肥0.45kgN/a、施肥0.25kgN/a平均)。ただし、アミロース含量は2018年～2021年、味度は2017年～2021年の平均値。

2)玄米調製網目幅は2015年は1.80mm、2016年以降は1.85mm。

3)目視評価、値が小さいほど良い。4.5以下が農産物検査1等に相当。

4)基準品(農業技術振興センター産コシヒカリ)との7段階相対評価(-3～+3)。パネル約20名。

5)静岡精機(株)米麦分析計BR-5000で測定。水分15.0%換算。

6)ビーエルテック(株)オートアナライザーIII型により搗精歩合約90%の白米を粉碎測定。

7)東洋ライス(株)トヨ一味度メーターMA-30Aおよびマルチ味度メーターMA90システムによる測定値。

8)化学肥料による試験データ。「化学肥料や殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)を使用しない栽培」の場合、約10%程度は精玄米重が少なくなると想定している。

また、短強稈なのでほとんど倒伏しませんが、穂肥が多過ぎる場合には、未熟粒の増加や食味の低下が懸念されます。一方で、登熟期間に栄養が不足すると減収や背白粒の増加によって品質低下する場合もあることから、穂肥施用は収量と玄米外観品質、食味のバランスを考慮することが必要です。

いもち病に対する抵抗性は十分ではなく、縞葉枯病に対しても抵抗性を備えていません。したがって、これら病害の常発地では栽培を避けてください。なお、栽培にあたって、殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)は原則使用しないこととしていますが、いもち病やウンカ類の多発時には、環境こだわり栽培基準の範囲内での使用は可能です。

～さいごに～

今年度の「みらいにつなぐ近江米新品種プロジェクト」の実証ほの実施農家の方からは「滋賀83号」は「コシヒカリ」よりも食味、品質が超えており期待しているとのお声もいただきました。



図2 稲株の比較



図3 玄米の比較

「滋賀83号」の正式名称は令和5年2月に発表予定です。この品種が近江米の一翼を担えるように成長するとともに、これをきっかけに、「環境こだわり農業」や「オーガニック栽培」の取組が拡大し、近江米全体のイメージアップにつながることを期待しています。

新品種の名称

食のブランド推進室

新品種の名称投票開催中！

令和 6 年度に本格デビューする予定の近江米新品種の名称決定に向け、「名称投票」を実施中です。皆様の投票お待ちしております。

■これまでの経過

新品種の名称決定について、令和 4 年 10 月 11 日～11 月 13 日まで名称候補の公募を行ったところ、全国各地から 3,522 点の応募がありました。これらの中から、応募規定や商標等による絞り込みを行った後、関係団体や生産者、消費者等の代表者で構成する名称候補選考会議によって 3 点が選出されました。今回はこれら 3 点とプロのコピーライター考案の 2 点を合わせ、5 点の候補で名称投票を行います。



■名称投票

・投票期間：令和 4 (2022) 年 12 月 20 日 (火) ~ 令和 5 (2023) 年 1 月 31 日 (火)

・投票方法

①専用ページ

(<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/shigotosangyou/nougyou/ryutsuu/327235.html>)

注意事項等をご確認の上、専用フォームに必要事項を入力しご投票ください。

②はがき

<投票したい名称候補><お名前><電話番号><賞品送付先住所>をご記入の上、以下の運営事務局まで郵送でお送りください。

【宛先】 〒524-0037 滋賀県守山市梅田町 2-1 セルバ守山地下 1 階

株式会社しがトコ [近江米名称投票係] 宛

・名称候補：「きらみずき」「滋味満天」「よばれてや」「みちる」「てとて」

・ご投票いただいた方の中から、抽選で 10 名様に近江米新品種 2kg をプレゼント！

・名称の発表は 2 月下旬を予定しています



■近江米新品種特設サイト 「#みらいの近江米」

近江米新品種についての特設サイト (<https://shigaquo.jp/torikumi/mirai/>) を開設し、新品種の開発秘話や近江米の魅力についての情報を発信しています。

ぜひご覧いただき、投票先の検討にもご活用ください。



#みらいにつなぐ
近江米

この美しい滋賀の風景を選んで投票してください!
新品種の名前を選んで投票してください!

2024年秋デビュー! 近江米新品種

名称投票

Let's Vote!

【投票締切】2023年1月31日(火)23:59まで

これぞ!と思う名称に、投票お願いします!

名称の意味は裏面を御覧ください

Name
E

てとて

Name
D

みちる

Name
C

よばれてや

Name
B

滋味満天
じみまんてん

Name
A

きらみずき



賞品

ご投票いただいた方の中から、抽選で10名様に
近江米新品種2kgをプレゼントします。

応募
方法

特設Webサイト／もしくは
ハガキでご投票ください。
一部店舗で店頭投票も実施しています。
詳しくは特設Webサイトにて!



特設Webサイトから、募集テーマの意図や、近江米STORY、現候補案についても
ご紹介しています。詳しくは、QRコードからご覧ください!



♪各名称に込められた意味♪

Name E てとて	Name D みちる	Name C よばれてや	Name B 滋味満天	Name A きらみずき
人と自然と、ともに手を取り合って作られたお米。オーガニックや環境に配慮した栽培方法では、自然の力を活かし、調和する中で作られます。また、手と手を合わせることが「いたします」こと、「こちそくさま」の象徴。手と手を繋ぎ、手と手を合わせることで、美味しいご飯になるように。	時が満ちて誕生した、人にも自然にもやさしいお米。40年以上前から環境に配慮した作り方を進めてきた滋賀県の農業に、オーガニックを中心とする時代の風潮がようやく追いつき、いよいよ時が満ちたということから。環境に配慮されたお米を食べることで、心も身体も満ち足りる暮らしへの願いも込めて。	「よばれる」というのは、「召しあがる」「こちそうになる」という意味で滋賀の方言。人に對してもなすときには、温かい気持ちがこもった言葉。	滋賀県の環境に配慮して栽培された「滋味」と美味しさがいっぱい詰まつた近江の米が全国(天下)に満ち広がり「満天」になることを願つて。「滋味」の意味は「栄養があつて味のいいこと。栄養豊富でおいしい食べ物」ということ(※)。まさに滋賀の味「滋味」が、天下に広がるよう(ニ)。	キラキラして、みずみずしいお米。近江米の新品種の、あつさりと食べやすいという特徴をみずみずしさとして表現。琵琶湖という日本一の水瓶を守る滋賀県から誕生する、新しい近江米が、未来に向かつてキラキラと輝き続けられるように。



特設Webサイトでは、近江米REPORTや動画を随時更新していきます。
ぜひチェックしてください!



【投票要項】

【投票期間】2022年12月20日(火)~1月31日(火)

【発表】名称の発表:2023年2月下旬(予定)

※滋賀県ホームページや「滋賀のおいしいコレクション」内特設ページでの発表を予定

【賞品】ご投票いただいた方の中から、抽選で10名様に近江米新品種2kgをプレゼントします。

【投票資格】誰でも投票可能。どしどしご投票ください!

【投票方法】特設Webサイト、もしくは郵送にて。一部店舗で店頭投票も実施します。
郵送の場合は、<投票したい名称案><お名前><電話番号><賞品送付先住所>を書いて、以下の運営事務局まで郵送でお送りください。

〒524-0037 滋賀県守山市梅田町2-1 セルバ守山地下1階
株式会社しがトコ [近江米 名称投票係]

【投票規定】

- 一人1回の投票です。重複での投票があった場合は無効にさせて頂きます。
- 投票状況などについての問い合わせにはお答えできません。



主催:滋賀県 農政水産部 みらいの農業振興課 食のブランド推進室 マーケティング係
[お問い合わせ]令和4年度みらいにつなぐ近江米新品種プロモーション業務運営事務局(株式会社しがトコ内)
〒524-0037 滋賀県守山市梅田町2-1 セルバ守山地下1階 TEL 077-585-9379(平日10:00-17:00)/メール info@shigatoco.com

令和5年産 近江米生産基本方針

近江米振興協会

1 情勢

【令和4年産米の作付動向】

- ・全国の主食用米の作付面積は、前年産（130.3万ha）から5.2万ha減少の125.1万ha、生産量は前年産（701万トン）から30.5万トン減少の670万トンとなった。
- ・本県での主食用米の生産量は、昨年12月の滋賀県農業再生協議会臨時総会において設定された主食用米の生産目標（生産の目安）147,396トンに対し144,900トンとなった（面積換算値では、28,455haに対し27,700ha）。

【本県産米の作柄と品質の概況】

<早生品種>「みずかがみ」、「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」

- ・「みずかがみ」では幼穂形成期頃が高温・多照で経過したことで穂数は平年より多く、粒数は増加した。7月下旬～8月上旬の高温・多照により登熟が順調に進み、出穂から成熟までの日数は早くなかった。一部では白未熟粒が増加したが、品質は平年並であった。
- ・「コシヒカリ」と「キヌヒカリ」では、幼穂形成期頃が高温・多照で経過したことで穂数は平年より多く、粒数は増加した。8月中下旬の日照不足や倒伏による登熟歩合が低下し、くず米が多くなった。品質は、出穂期にあたる7月下旬からの高温・登熟期後半の日照不足の影響から、白未熟粒による格落ちが目立ち、1等米比率は平年より低かった。また、一部のほ場ではいもち病の発生、降雨による倒伏や台風前の早刈りにより、収量はやや少なくなった。

<中生品種>「日本晴」、「秋の詩」

- ・生育が良好であったことから、収量は平年並となった。しかし、穂いもちの発生した地域で、収量がやや少なくなった。また、登熟期後半の9月中旬に多照となったことから、品質は良好であった。
- ・農林水産省が公表した作況指数（12月9日公表）は、全国が「100」の「平年並み」で、本県では「101」の「平年並み」、水稻うるち玄米の1等米比率（10月31日現在）は、全国平均が79.4%で、本県平均が66.6%となっている。

【需給および価格の動向】

- ・令和4年産米の全国の作柄が「平年並み」で、生産量は670万トンとなり、民間在庫量や需要量から、適正在庫量200万トンを超えない水準となった。
- ・令和4年産米の相対取引価格は全国的に前年比108%と上昇し、近江米の主要銘柄についても、前年より3～10%上昇している（出回りから10月までの年産平均価格）。

【令和5/6年の需要見通しと令和5年産の生産量】

- ・国の「米穀の需給及び価格の安定に関する基本指針」（以下、「基本指針」という。）では、国民1人当たりの米消費量および人口の減少を考慮し、令和5/6年の需要量は令和4/5年の691万トンに比べ11万トン少ない680万トンと見通すとともに、令和5年産主食用米の適正生産量を本年産の生産量（670万トン）と同水準の669万トンと設定されたところ。

【今後の情勢】

- ・令和5年産米の需給均衡に向けて、全国で令和4年産と同水準の作付面積が設定されているが、依

然として需要に応じた生産が必要である。

- ・一方、全国の主要産地では需要を確保するための取組が加速し、産地間競争が一層激化している状況。
- ・こうした背景から、県内外における近江米の需要を確保するとともに、事前契約等による生産と販売の結び付きのもとで安定した生産と供給に取り組む体制づくりを進め、近江米のブランド力の向上と生産者の所得向上を図ることが喫緊の課題となっている。

2 令和5年産米の生産に向けた基本的な考え方

- ・滋賀県農業再生協議会では、令和5年産米の生産目標（生産の目安）について、「基本指針」をはじめ、本県産米の民間在庫量、需要実績の推移等を総合的に勘案し、144,840トンと設定されたところ。
- ・この数値を目安とし、事前契約（播種前契約、複数年契約等）に基づく需要に応じた米づくりなど産地の戦略的な取組を着実に進めることで、全国に占める近江米の需要量シェアの維持・向上を図る。
- ・具体的な取組として、集荷業者は卸売業者等が求める品種や用途等の情報を把握するとともに、生産者に対する情報提供や作付提案を行い、事前契約による実需者との結び付きを強化する。
- ・生産者は、求められる米をしっかりと生産し供給するなど、契約に基づいた生産を基本とし、契約があるものを確実に出荷することで経営の安定化を図る。
- ・「みずかがみ」や「コシヒカリ」等の良食味品種については食味の高位安定化を進め、食味ランキング（日本穀物検定協会）での「特A」取得をはじめ、「環境こだわり米」の比率を高めるとともに、その象徴となる「オーガニック米」等の特色ある米づくりやGAP等の取組による安全・安心な米づくりを進め需要の拡大を図る。
- ・栽培においては、恒常化している気象変動、特に夏期の異常高温に適応するため、土づくりをはじめ基本的な技術対策を徹底するとともに、生育状況に応じた施肥や水管理、温暖化に伴い増加する病害虫防除などの迅速な情報提供により対策技術の実践を促し、収量と外観品質の安定を図る。
- ・農地の集積・集約化や農業機械の効率利用とともに、土壤診断等に基づく適正施肥等により生産コストの低減を推進する。
- ・これらの対策を総合的に実施することにより、「環境にやさしく、高品質で、安全・安心、おいしい」実需者から求められる近江米の生産を推進するものとする。

3 主要品種の作付方向

- ・マーケットインの視点に立った米づくりの指針となる「近江米生産・流通ビジョン」との整合性を図りつつ、契約に基づく生産と安定供給を推進する。
- ・具体的な推進にあたっては、家庭用、業務用等の用途別需要情報を関係機関が共有するとともに、生産者にその情報を確実に伝達したうえで作付提案を行い、集荷業者と生産者の間の播種前契約を中心とした事前契約を積極的に進めるなど、需要に見合った生産と集荷が確保できるよう全ての関係者が連携して取り組む。
- ・中でも家庭用として流通する「みずかがみ」は、作付面積が増加し、市場への流通量も増え、一定の需要があることから、収量を確保しつつ、品質および食味の均質かつ高位安定化が図れるよう食味分析等の徹底した品質管理のもとで作付けを推進する。
- ・主力品種の「コシヒカリ」については、「環境こだわり栽培」の比率を高めるとともに仕分けの徹底を図る。
- ・多くが業務用に流通している「キヌヒカリ」「日本晴」等の品種については、コロナ禍における需要動向を注視しながら実需者の意向を踏まえた作付けと供給に努めるとともに、収益性を高めるために、低コスト、多収栽培を進める。
- ・また、気候変動によるリスクを分散するため、「みずかがみ」「コシヒカリ」「キヌヒカリ」の早生品種と、

「秋の詩」「日本晴」などの中生品種等を組み合わせ、作期を分散した作付けを推進する。

4 技術対策

(1) 収量の安定化と品質の向上（全品種共通）

- ・近年は、気候変動の影響により、平年に比べて「気温」、「日照時間」および「降水量」の乱高下が認められ、また、大型台風等の気象災害が頻発するなど、近江米の収量と品質が不安定となっている。
- ・こうした気象変動に適応し、良質な近江米を生産するために、再度、基本技術を徹底する。特に、緊急的に対応が必要な技術については栽培期間中でも臨機応変に対応できるよう促す。取組が不十分な技術については、生産者が着実に実践するよう関係者が誘導を図り、安定した収量の確保と1等米比率80%以上を目指す。

<必須基本技術>

- ☞ 土壤診断結果に基づき有機物や土づくり肥料を施用するとともに、深耕等により根張りを促進するなど、土づくりを実践し栄養凋落を防止する。
- ☞ 前作の稻わらは優良な有機物であるため秋期（年内）にすき込み、腐熟を促進させる。
- ☞ 産地や品種、目指す米づくりに応じた収量目標を設定し、過度の窒素施肥や有機物施用を控える。
- ☞ 健全な育苗に努める。
- ☞ 3~4本／株の細植を基本とし、350~400本／m²の穂数が確保できるよう、品種特性や土壤条件等に合った適切な栽植密度を選択する。
- ☞ 施肥田植機では肥料の種類ごとに目盛りを調整し、規定量を確実に施肥する。
- ☞ 活着後は浅水管理に努め、分けづを促進させる。
- ☞ 還元障害は、前年の作物残さや雑草の腐熟が進んでいない状態で入水・代かきを行うと発生しやすくなるので、作物残さのすき込みは発生後早めに行い腐熟を促進させる。例年、冬雑草の多いほ場では、早春の碎土による除草や、入水・代かきまでの期間を十分あけて碎土・すき込みを行い、分解を促すとともに、移植後は分けづ期の水管理に注意する。
- ☞ 適期・適切に中干しを行う。
- ☞ 出穂前後各3週間の常時湛水（水深3~5cmに管理）を行い、品質低下の防止と収量向上を図る。
- ☞ 穂肥は、ほ場の地力、稻の生育（草丈、茎数、葉色）に応じて調整し、穗揃期の葉色が葉色板4.0以下を目標とする。また、全量基肥（一発肥料）栽培においても幼穂形成期以降の葉色が淡いほ場では、葉色を維持するため穗肥を施用する。
- ☞ 斑点米カメムシによる被害を防ぐために、出穂3週間前と出穂期の2回、畦畔の草刈りを行い、併せて適期に適切に薬剤防除を行う。
- ☞ 収量や品質に大きく影響する登熟期の水管理については、収穫作業に支障がない程度に落水を遅らせ、間断かんがいによる水分供給を徹底する。

<臨機応変な対応>

- ☞ 病害虫防除所から発表される発生予察情報に基づき、適期適切な病害虫防除を実践する。特に、「いちもち病」、「斑点米カメムシ類」および「トビイロウンカ」は収量および品質に大きな影響を及ぼすため、情報には注意する。
- ☞ 農業技術振興センターから発信される「水稻生育診断情報」、気象災害等の発生が予想される場合に発信される「技術情報」等に基づき、臨機応変に対策を実践する。特に、「きめ細やかな水管理」と全量基肥栽培における「追肥の必要性」には注意する。

(2) 「みずかがみ」の収量・食味の高位安定化

- ・「特A」産地に相応しい良食味米生産に努め、消費者等の期待に応えることが重要である。
- ・このため、令和5年2月に近江米振興協会が発行した「みずかがみ栽培マニュアル」に基づく技術

対策を徹底する。

5 「安全・安心」な滋賀の特色ある米づくり

- ・「環境こだわり米」の生産拡大を図ることとし、区分荷受け・区分管理により、「環境こだわり米」としてのロットを確保するなど、安定した流通に取り組む。
- ・「みずかがみ」については、全て「環境こだわり栽培」であることから、「環境こだわり米コシヒカリ」と「みずかがみ」について専用パッケージを用いて販売するなど安全・安心な近江米の代表的取組として継続する。
- ・さらに、水稻では環境保全型農業直接支払交付金の取組面積が全国一であること、生産者が国民的資産である琵琶湖の環境保全のために努力していることを「おいしさ」とともに県内外に発信するとともに、環境こだわり農業の象徴的な取組として「オーガニック農業」を推進する。
- ・食品としての安全性の確保に加え、環境保全、労働安全等を目的としたG A Pの取組とその高度化に向けての実践を推進する。
- ・カドミウムの吸収を抑制するため、土づくり肥料の施用および出穂前後各3週間の常時湛水を徹底する。

6 コスト低減を図るための技術対策等

- ・集落営農による水稻経営の一元化、担い手への農地の集積・集約化、作期分散に配慮した品種の作付けを進め、施設・機械の効率利用を図り、機械器具費等のコスト低減を推進する。
- ・近年、省力化やコスト削減につながるとして期待の大きい、水田の水管理遠隔操作技術、自動操舵機能付きトラクタ・田植機およびドローンを用いたリモートセンシング等のＩＣＴ等の先端技術を活用したスマート農業を推進する。
- ・直播栽培など低成本・省力技術の普及拡大を図る。
- ・土壤診断や生育診断等に基づく土づくりや効率的な施肥を進め、資材コストの低減を推進する。

7 環境保全対策の推進

- ・琵琶湖および周辺環境への負荷を軽減して農業の持続的発展を進めていくために、地力増進作物の作付けや自動操舵機能付き田植機の活用、農業濁水の流出防止、農業系廃プラスチックの排出抑制に取り組む。
- ・特に緩効性肥料の被膜殻が意図しない形で河川等へ流出することを防ぐため、水管理は適正に行う。

8 普及・推進体制

- ・これらの対策等の着実な実践を図るため、次の取組により、関係者の情報共有、農業者への周知を図る。
 - ☞ 需要に応じた米づくりを進めるため、品種別、用途別の生産状況や流通・販売動向について、あらゆる機会を通して生産者に対し確実に伝達する。
 - ☞ 安定した作柄や品質の高位安定化を図るため、生育情報の発信、啓発資材の配布、農談会の開催等を通してタイムリーな情報伝達を徹底する他、現地研修会の開催や部会組織等での研鑽活動を通して技術の実践に結び付ける。

別記

収量、外観品質および食味向上のための重点技術対策

①土づくり

- 秋耕による稻わらのすき込み
- 有機物や土づくり肥料の投入（土壌診断の実施）
- 深耕（作土深15cm以上を目標）

②植え付け（「みずかがみ」は極端な疎植をしない）

- 適期植え
- 細植え
- 適正栽植密度

品種	適期植え			細植え	適正栽植密度（坪あたり株数）		
	5月上旬	5月中旬	5月下旬		湖辺粘質	湖辺砂質平坦	中山間
みずかがみ	○	○	×	3~4本/株	60	60~70	70
コシヒカリ	×	○	○		50~60	60	60~70
キヌヒカリ							
中生・晩生	○	○	○				

栽植密度 (/坪)	50株	60株	70株
必要苗箱数 (/反)	14~15	16~17	18~20

※播種量150g/箱、植え付け本数3~4本/株

③施肥

- 地帯別の適正かつ確実な基肥、追肥施用
 - ・高温時における登熟期の栄養不足を回避するため、適期に必要量を確実に施用する。
 - ・「コシヒカリ」「秋の詩」は倒伏を回避しつつ登熟後半まで栄養状態を維持するため、分施体系または緩効性肥料の利用とする（幼穂形成期までの生育量が過剰の場合は、分施体系の2回目を重点施用とする）。
- 生育に応じた穗肥施用
 - （幼穂を確認し葉色、株張りに応じて穗肥を施用する）
- 大豆跡の適正施肥
 - ・「みずかがみ」の場合、基本は基準の半量が上限であるが、地力が低い場合や、大豆の収量が思わしくなかった場合は、施肥量を増量するなど調節する。一例として、大豆の収量が180kg/10a以下の場合は、基準量の7割程度を施用する。
- 全量基肥一発肥料の必要量投入
 - ・田植前に、施肥量を調節するダイヤルの調整を行い、落下量を確認し、確実に施肥する。
- 気候変動に応じた施肥の実践
 - ・全量基肥一発肥料を用いた栽培においても、気象の推移によっては追肥が必要になる場合があることを認識し、生育診断情報を参考に気候変動に応じた施肥を実践する。

④水管理・防除・収穫

- 活着後の浅水管理
- 早めの溝切りと中干し
 - ・茎数が目標穂数の8割になつたら速やかに中干しを行う。
 - ・中干しの実施により太く強い茎を作るとともに、収穫前まで入水できる田面の硬さを確保する。
- 出穂前後各3週間は常時湛水（水を切らさないように、水深3~5cmで管理）
- 収穫5日前まで間断かんがい（胴割粒の防止、粒大の確保）
- 発生予察に基づく防除（いもち病、紋枯病の本田防除）
 - ・過去に発生が見られなくても、温暖化に伴い増加する病害虫（トビイロウンカ等）に注意する。
- 畦畔2回連續草刈り
 - （斑点米カメムシ防除 出穂3週間前と出穂期の2回連續）
- 品種別に適期に防除（斑点米カメムシ防除）
 - ・「みずかがみ」や中生品種で被害が多いところは注意
- 適期収穫（糊黄化率：85%が目安で品種特性に注意、刈り遅れない）
- 適正な乾燥（高水分粉を急激に乾燥しない）

令和4年産 水稻の生育概況と 次年度に向けた技術対策

農業技術振興センター
栽培研究部

1. はじめに

農林水産省が公表する滋賀県の令和4年産水稻の作況指数は「101」、作柄の良否は「平年並」となりました。

水稻の生育は、作期や品種、土壌条件、管理方法等さまざまな要因により異なります。そこで、本稿では、農業技術振興センターにおける水稻作況調査結果の分析を中心に、本年の水稻の作柄について一考察します。

2. 令和4年産水稻の生育概況

1) 気象概況

本年の気象では、①6月第4半旬～7月第3半旬の高温、②7月～9月の寡照（日照不足）③7月第6半旬～9月第4半旬の高温傾向の3点が特徴的でした。これらが水稻の生育に強く影響したと考えられます（図1参照）。

2) 水稻作況調査結果から見た生育概況

水稻作況調査は以下の方法で実施しました。

<水稻作況調査耕種概要>

移植日：5月10日（稚苗、手植え）
栽植密度：「みずかがみ」・「コシヒカリ」18.5株/m²
施肥：「みずかがみ」基肥4-穂肥3（kgN/10a）
：「コシヒカリ」
基肥2-追肥2-穂肥①2-穂肥②2（kgN/10a）
※平年値は、平成25～令和3年（9年間）の平均値。

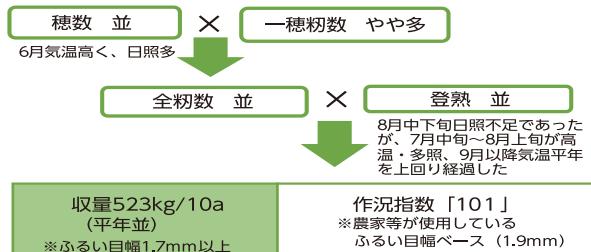
《生育》（図2参照）

■5月中下旬の気温は平年並で多照により、生育初期の「みずかがみ」の茎数は平年並、「コシヒカリ」は平年より多くなりました。

■6月中旬～7月上旬の気温は平年より高く、6月第6半旬～7月上旬の日照時間は平年より多く、出穂期は「みずかがみ」で平年より2日早く、「コシヒカリ」で1日早まりました。

■6月20日から7月30日までの葉色は「コシヒカリ」、「みずかがみ」とともに平年と比べて高く推移しました。

滋賀県の作柄概況～近畿農政局公表～



※出典：「令和4年産水稻の収穫量(近畿)」
(近畿農政局、令和4年12月9日発表)



図1 令和4年稲作期間の気象(彦根アメダス)

同一場所に設けた窒素無施用区での「コシヒカリ」の窒素吸収量は、6月10日時点では平年（H30～R3年度）に比べて少なかったものの、6月中旬以降の地温上昇により急激に増加し、6月30日時点では平年と比べて多くなりました。

《収量》（図3参照）

■「みずかがみ」の精玄米重（網目1.9mm）は589kg/10a（平年比98%）、「コシヒカリ」の精玄米重は516kg/10a（平年比92%）となりました。

■「みずかがみ」は、穂数、一穂粒数は平年よりも多くなりましたが、登熟歩合は81.9%（平年比92%）と低くなりました。「コシヒカリ」では、一穂粒数は平年並であったものの穂数が450本/m²と多く、m²当たり粒数は多くなりましたが、

登熟歩合が68%（平年比89%）と低くなり、大きく減収しました。

《品質》

■8月中下旬の気温が平年並からやや高く、寡照となったことから、「コシヒカリ」では、白未熟粒が多くなり、外観品質は悪くなりました。登熟期の倒伏も乳白の発生を助長したと考えられました。

一方、「みずかがみ」では白未熟粒が少なく、外観品質は平年並みとなりました。

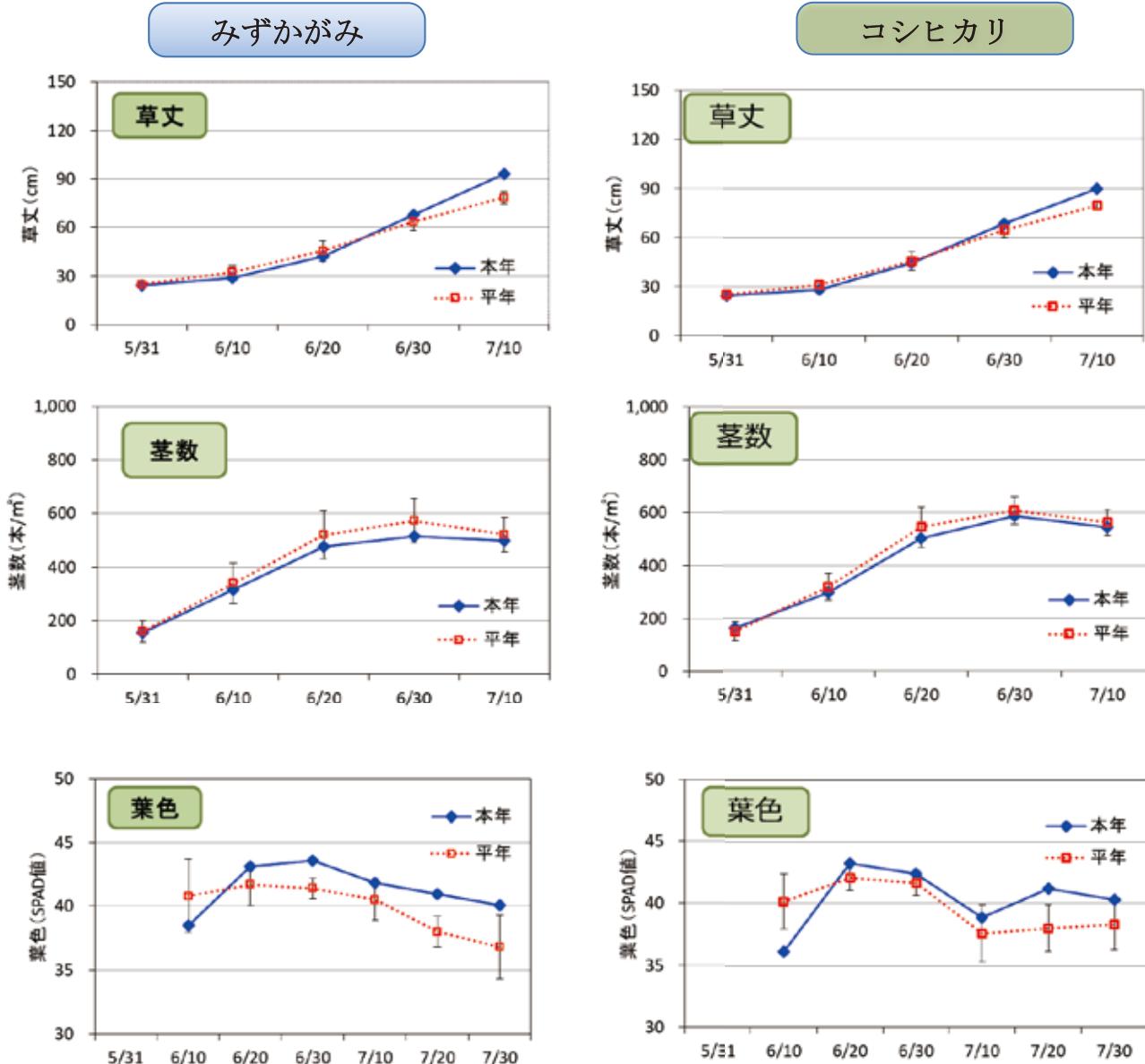


図2 生育経過

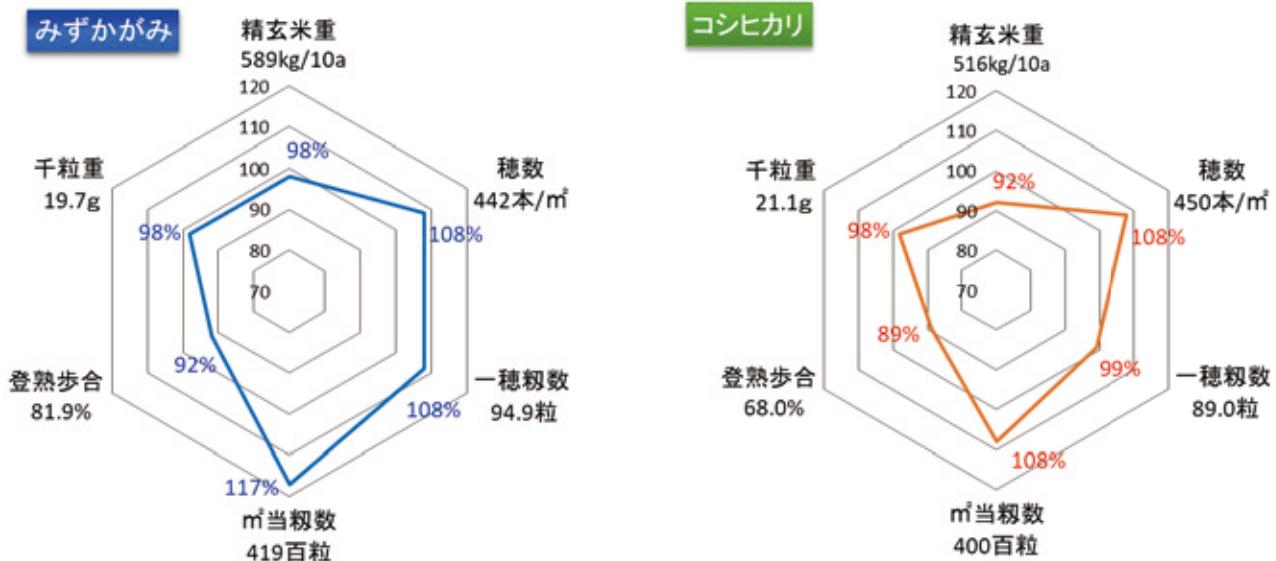


図3 収量及び収量構成要素の平年値との比較

注)精玄米重は粒厚1.9mm以上、千粒重は粒厚1.8mm以上の玄米重

3. 次年度に向けた技術対策

異常気象が頻発する近年、気候変動に対応し、安定した収量・品質の確保が求められます。そのためには、以下に示す基本技術の徹底が必要不可欠です。

土づくりに力を入れましょう

■ 収穫期まで根の活力を維持するため、土壤改良資材の施用や深耕の実施等、しっかりした土づくりを行いましょう。

「みずかがみ」は初期の茎数確保を

■ 「みずかがみ」は初期の茎数増加が緩慢なため、極端な疎植は避け、基肥は基準量を確実に施用しましょう。

「コシヒカリ」は過繁茂の防止を

■ 「コシヒカリ」は玄米外観品質向上のため、過剰な粒数を抑える必要があります。また、稈長が長い「コシヒカリ」では倒伏による登熟不良も品質・収量低下につながります。適正な植付

本数や施肥、適期中干しにより過繁茂を防止し、太く健全な茎を確保しましょう。

稻の生育に合わせた施肥を行いましょう

■ 基肥一発施用の緩効性肥料を用いた場合、高温年には生育後半に肥料が切れたり、低温年には肥効発現が不足したりすることがあります。幼穂形成期に葉色が淡い場合や株張りが例年より小さい場合には、水稻生育診断情報等を参照に穗肥の追加を検討しましょう。なお、最新の農業情報は「しらしがメール」および「しらしがLINE」で配信しています。

病害虫の発生に留意し適期に防除しましょう

■ 病害虫の発生状況に関する発生予察情報等に留意し、適期に防除を行いましょう。

■「みずかがみ」は初期の茎数確保を！



写真 還元障害は場
丸枠内、還元により分けつ少なく、葉先黄化症状

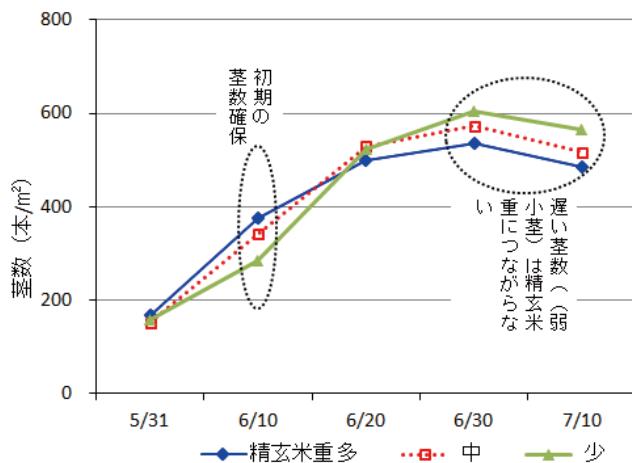


図4 「みずかがみ」 茎数推移との精玄米重の関係

精玄米重多：2013年、2016年、2018年、2020年（平均精玄米重 61.7kg/a）
中：2014年、2019年、2022年（平均 59.0kg/a）
少：2015年、2017年、2021年（平均 58.2kg/a）
※ 精玄米重は粒厚1.9mm以上

- 初期（移植後1ヶ月）の茎数を確保することで収量安定につながります。図は作況試験における精玄米重ランク別（精玄米重多、中、少）の茎数増加を表しています。「みずかがみ」は、移植後1ヶ月後に、収量多では茎数375本/m²（20.2本/m³）、収量中では茎数342本/m²（18.5本/m³）、収量少では茎数285本/m²（15.4本/m³）でした。遅くからの茎数増加は弱小茎となり、収量には結びついていません。
- 「みずかがみ」は初期の茎数増加が緩慢なため、栽植密度を他の品種よりやや多くし、基肥は基準量を確実に施用しましょう。
- 気温が上昇する5月下旬以降は、土壤中の微生物の働きが活発になり、土壤が酸欠状態になり還元障害が発生しやすい時期です。
春作業での過度な代かきや移植後の深水管理は、土に酸素が供給されにくくなるため避けましょう。
移植後、初期の生育状況をこまめに観察し、①ほ場内に踏み込むとガスが発生する、②茎数が増えない、③葉先の黄化しているなど還元症状が見られたら、早めにほ場を一度干すことが重要です。
- 登熟期の水管理はしっかりと行いましょう。落水時期の目安は収穫の5日前ですが、収穫作業に支障がない限り出来るだけ遅らせ、根や葉の活力を収穫直前まで維持させましょう。
刈り取りは糊黄化率85%が目安で品種特性に注意し、刈り遅れないようにしましょう。

■「コシヒカリ」は適正な茎数と葉色維持を！

- 「コシヒカリ」は夏期の高温により、乳白粒などの白未熟粒が発生しやすいため、適正な茎数（穂数）に抑え、葉色を維持するよう施肥や水管理に注意しましょう。また、倒伏は品質低下を助長するところから、倒伏させないよう特に施肥管理に注意しましょう。
- 「コシヒカリ」の穂肥施用基準を参考に幼穂形成期の生育状況に合わせて施用量の調整をしましょう（表1）。

- 全量基肥栽培「コシヒカリ」について、米品質の低下を防ぐために以下の場合は追肥を行いましょう（表2）。

①葉色が淡い場合

②生育が旺盛で粉数方が良そうされるほ場において、倒伏の心配がなく、葉いもちが発生していない場合

追肥を行う前には、水稻の生育量を確認し、施用するかどうかを判断しましょう。また、環境こだわり栽培の場合は、有機質肥料を使用するなど、施肥基準を遵守してください。

- 高温年は出穂のばらつきが大きくなる傾向があり、収穫時期が近づいたら、ほ場に入って穂（粉）の色をしっかり確認しましょう。収穫適期は、粉黄化率85%が目安で品種特性に注意し、刈り遅れないようにしましょう。

表1 「コシヒカリ」の穗肥施用基準

幼穂形成期の生育状況		穂肥施用方法（施用量の単位は10a当たり窒素量）
株張り (60株/坪植の 茎数)	葉色 葉緑素計値 (葉色板値)	
大 (25本/株以上)	濃 35 (3.8) 以上	幼穂形成期7日後に1kg、同14日後に3kg施用
	淡 35 (3.8) 未満	
標準 (20~25本/株)	濃 35 (3.8) 以上	幼穂形成期7日後に2kg、同14日後に2kg施用
	淡 35 (3.8) 未満	
小 (20本/株以下)	濃 35 (3.8) 以上	幼穂形成期4~5日後に2kg、同11~12日後に2kg施用
	淡 35 (3.8) 未満	

表2 標準量を施用した全量基肥栽培「コシヒカリ」の追肥要否判断の目安

水稻の生育量 (追肥判断基準)	追肥の施用方法
葉色が淡い (葉緑素計値38(葉色板4)以下)	幼穂形成期の14日後(出穂の11日前頃)までに10a当たり窒素成分で2kg施用
生育旺盛 (茎数25本/株以上)	

令和4年産 米の検査結果から

滋賀県農政水産部
みらいの農業振興課

1.検査状況

○滋賀県内における、令和4年10月末現在の検査数量は以下のとおりとなっています。

☆種類別

	4年産米	前年同期	対前年比
水稻うるち玄米	69,673t	70,579t	98.7%
醸造用玄米	1,058t	947t	111.7%
水稻もち玄米	1,639t	1,773t	92.4%
計	72,370t	73,299t	98.7%

☆主な品種別(水稻うるち玄米)

	4年産米	前年同期	対前年比
コシヒカリ	22,789t	22,889t	99.6%
キヌヒカリ	11,118t	11,149t	99.7%
日本晴	4,477t	5,592t	80.1%
秋の詩	5,180t	5,167t	100.3%
みずかがみ	11,127t	11,107t	100.2%

2.品質概況

○滋賀県内の10月末現在の水稻うるち玄米の1等比率は66.6%(前年同期79.6%)となっています。

☆主要な品種別の1等比率

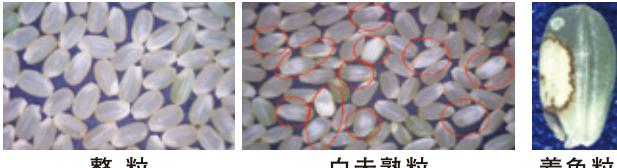
コシヒカリ	58.1% (77.2%)
キヌヒカリ	45.6% (72.5%)
日本晴	81.0% (80.8%)
秋の詩	90.6% (84.2%)
みずかがみ	88.6% (94.4%)

☆2等以下に格付けされた主な理由

形質不良 (心白及び腹白、充実不足)	47.2% (38.3%)
整粒不足	30.9% (36.1%)
着色粒	16.3% (15.8%)

注:()は令和3年産同期(10月末)

注:()は令和3年産同期(10月末)



整粒

白未熟粒

着色粒

○主要品種の品質概況

【早生品種】 幼穂形成期頃が高温・多照で経過したことから穂数は平年より多くなり、粒数は増加しました。8月中下旬の日照不足や倒伏により、登熟歩合が低下し、くず米が多くなりました。品質は出穂期にあたる7月下旬からの高温、登熟期後半の日照不足の影響から、白未熟粒の発生が目立ちました。また、一部のほ場ではいもち病の発生、降雨による倒伏や台風前の早刈りにより、収量はやや少なくなりました。

【中生・晚生品種】 生育が良好であったことから、収量は平年並となりました。しかし、いもち病が発生した地域で、収量がやや少なくなりました。登熟期後半のは9月中旬に多照となったことから、品質は良好でした。

【2等以下の格付理由】 2等以下の格付け理由では昨年産と同様に形質不良が最多となりました。早生品種において白未熟粒の発生が多くなったことが影響しました。

(参考)主要品種の過去3カ年の1等比率
(令和元年、令和2年産は翌年10月末現在の確定値、令和3年産は翌年3月末現在の速報値)

	令和3年産	令和2年産	令和元年産
水稻うるち玄米 <全国平均値>	79.0% <83.1%>	67.5% <79.8%>	54.5% <73.2%>
コシヒカリ	76.6%	74.7%	42.7%
キヌヒカリ	72.9%	50.6%	28.7%
日本晴	83.3%	47.5%	76.9%
秋の詩	72.9%	65.1%	61.7%
みずかがみ	94.4%	86.2%	76.6%

【特集】令和4年水稻を振り返る

～昨年の水稻病害虫の発生概況について～

病害虫防除所

昨年の水稻病害虫発生概況

1) 葉いもち (発生時期：やや遅、発生量：多)

ほ場での初発確認は6月28日で、発生時期は、やや遅くなりました。その後、葉いもちの感染好適日が7月1半旬と7月4半旬に県内全域で確認されたことや、7月の降水量が平年より多かった（平年比160%）ことにより、葉いもちの感染が拡大しました。7月中旬の調査では、葉いもちの発生ほ場率が48.3%となり、過去10年間で最も高くなりました。

2) 穂いもち (発生時期：平年並、発生量：やや多)

ほ場での初発確認は7月27日で、発生時期は平年並となりました。伝染源となる葉いもちの発生量が平年より多かったことから、県内全域で発生が認められ、発生ほ場率は81.7%と高くなりました。

一方、県内の主要な早生品種の出穂期前後（7月下旬～8月上旬）の降水量は、平年よりやや少なく、気温は高くなつたため、多発したほ場は限られ、穂いもちの発生量はやや多となりました。



穂いもち

3) 紹枯病 (発生時期：遅、発生量：平年並)

5月上旬の低温により初期の分げつが、やや遅れたため、紹枯病の初発は遅くなりました。また、初発後も茎数は、やや少なく推移し、7月中旬までの発生（水平進展）は、やや少なくなりました。

一方、7月以降、気温が高く、降水量も多くなつたため、発生（垂直進展）が急激に増加したことにより、最終的な発生量は平年並となりました。

4) トビイロウンカ (発生時期：早い、発生量：平年並)

予察灯での初発確認は7月18日で平年より早く、県内4地点の予察灯でも1～2頭ずつ確認されました。さらに、近隣府県においても飛来が確認されたことから、本県での被害が懸念されましたが、最終的に被害は確認されませんでした。

5) 斑点米カメムシ類 (発生時期：平年並、発生量：やや多)

6月下旬の畠畔イネ科雑草で、多く見られました。7月以降は、一部地域の畠畔雑草地や本田でクモヘリカメムシなど大型カメムシが多くなりました。全県で出穂防除が実施されましたが、大型のホソハリカメムシ、クモヘリカメムシおよびトゲシラホシカメムシだけでなく、小型のカスミカメムシ類が多数確認され、全体の発生量は、やや多となりました。

この要因として5月から6月下旬までの気温が高かつたことが考えられます。

なお、近年、イネカメムシが県内各地で確認されており、生息域が拡大しています。多発すると、被害が他のカメムシ類よりも大きくなることから、今後も注意が必要です。



イネカメムシ

滋賀県病害虫防除所ホームページ

<http://www.pref.shiga.lg.jp/boujyo/>

最新の発生予察情報やIPM、病害虫の見分け方などの関連情報を載せています。また、農作物病害虫雑草防除基準へのアクセスもできます。詳しくは検索・クリックしてください。

滋賀 防除所

検索

令和4年産 水稻の作況水稻

年次別推移(滋賀県)ふるい目幅別10a当たり収穫
および収穫量(子実用)の推移を含む

近畿農政局滋賀県拠点

水稻(子実用)の年次別推移(滋賀県)

年産	作付面積 (子実用)	10a当たり 収量	収穫量 (子実用)	参考		
				主食用 作付面積	収穫量 (主食用)	作況指数
平成4年産	ha	kg	t	ha	t	
5	41,300	503	207,700	102
6	42,500	443	188,300	89
7	47,400	525	248,900	106
8	45,500	509	231,600	102
9	42,200	509	214,800	102
10	41,800	473	197,700	95
11	38,300	497	190,400	99
12	37,900	508	192,500	101
13	37,400	524	196,000	103
14	35,400	517	183,000	102
15	34,800	516	179,600	101
16	34,300	478	164,000	93
17	35,100	528	185,300	103
18	35,300	535	188,900	103
19	34,700	513	178,000	99
20	33,900	518	175,600	100
21	33,200	530	176,000	32,700	173,300	102
22	33,200	512	170,000	32,700	167,400	99
23	33,100	516	170,800	32,500	167,700	100
24	32,700	513	167,800	32,100	164,700	99
25	32,800	529	173,500	32,200	170,300	102
26	32,400	529	176,700	32,000	169,300	102
27	33,000	502	165,700	31,300	157,100	97
28	32,200	518	166,800	30,600	158,500	100
29	31,900	534	170,300	30,200	161,300	104
30	31,700	517	163,900	30,000	155,100	100
令和元年産	31,700	512	162,300	30,100	154,100	99
2	31,700	509	161,400	30,200	153,700	98
3	31,100	509	158,300	29,700	151,200	98
4	30,100	519	156,200	28,900	150,000	100
	29,000	523	151,700	27,700	144,900	101

注：1 10a当たり収量及び収穫量は、1.70mmのふるい目幅で選別された玄米の重量である。

2 作況指数は、平成26年産以前の作況指数は1.70mmのふるい目幅で選別された玄米を基に算出し、平成27年産から令和元年産までの作況指数は、全国農業地域ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでの目幅(近畿は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出している。令和2年産以降の作況指数は、都道府県ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、最も多い使用割合の目幅以上に選別された玄米を基に算出した数値である(滋賀県1.90mm)。

3 「…」は、事実不詳又は調査を欠くことを示している。

ふるい目幅別10a当たり収量及び収穫量（子実用）の推移（滋賀県）

年 産		1.70mm 以 上	1.75mm 以 上	1.80mm 以 上	1.85mm 以 上	1.90mm 以 上	2.00mm 以 上
平成24年産	10 a 当たり収量 (kg)	529	525	518	509	498	439
	収穫量（子実用）(t)	173,500	172,100	170,000	167,100	163,400	143,800
25	10 a 当たり収量 (kg)	529	524	517	507	495	434
	収穫量（子実用）(t)	176,700	175,100	172,600	169,300	165,200	145,100
26	10 a 当たり収量 (kg)	502	496	487	476	462	392
	収穫量（子実用）(t)	165,700	163,900	160,900	157,100	152,600	129,200
27	10 a 当たり収量 (kg)	518	513	504	492	478	400
	収穫量（子実用）(t)	166,800	165,300	162,300	158,300	153,800	128,900
28	10 a 当たり収量 (kg)	534	531	525	517	507	451
	収穫量（子実用）(t)	170,300	169,300	167,400	164,900	161,600	143,900
29	10 a 当たり収量 (kg)	517	511	504	495	482	413
	収穫量（子実用）(t)	163,900	162,100	159,800	156,900	152,900	130,800
30	10 a 当たり収量 (kg)	512	508	501	492	479	403
	収穫量（子実用）(t)	162,300	161,000	158,900	155,800	151,800	127,700
令和元年産	10 a 当たり収量 (kg)	509	505	498	489	478	414
	収穫量（子実用）(t)	161,400	160,100	157,800	155,100	151,600	131,200
2	10 a 当たり収量 (kg)	509	504	497	488	475	417
	収穫量（子実用）(t)	158,300	156,900	154,500	151,700	147,900	129,800
3	10 a 当たり収量 (kg)	519	513	505	495	483	405
	収穫量（子実用）(t)	156,200	154,500	152,000	148,900	145,300	122,000
4	10 a 当たり収量 (kg)	523	518	511	501	487	429
	収穫量（子実用）(t)	151,700	150,300	148,200	145,300	141,200	124,400
対 前 年 比 (%)		97	97	98	98	97	102

注：1 ふるい目幅別の10a当たり収量とは、10a当たり収量にふるい目幅別重量割合を乗じて算出したものである。

2 ふるい目幅別の収穫量（子実用）とは、収穫量にふるい目幅別重量割合を乗じて算出したものである。

資料：「令和4年産水稻の収穫量（近畿）」（令和4年12月9日公表、農林水産省近畿農政局）

1. 価格・販売状況

- ア. 農水省公表の令和4年産10月の令和4年産米相対取引価格(出荷業者と卸売業との間の玄米の相対取引契約価格)は、60kgあたり12,715円(前月差▲58円、前年同月 差+721円、包装代・消費税相当額を除く)となった。前年同月価格から上向いているため、今後も需要は引き継まってくると考えられる。
- イ. 令和4年12月上旬における令和4年産市中価格は、前年同月の市中価格から+2,100円～2,400円下回る水準となっています。

図表1. 相対取引価格の推移



(備考) 農林水産省公表相対価格にもとづき作成。包装代・消費税相当額を控除した価格。

図表2. 令和4年産市中価格の状況

(単位:円/60kg、税抜)

産地	岩手	宮城	茨城	栃木	千葉
銘柄	ひとめぼれ	ひとめぼれ	コシヒカリ	コシヒカリ	コシヒカリ
4年12月上旬(4年産)①	12,600	12,700	12,200	12,600	12,200
3年12月上旬(3年産)②	10,300	10,500	9,800	10,500	9,800
①-②	2,300	2,200	2,400	2,100	2,400

*市中価格は、関東着・大阪着・在姿、包装込。

*米穀市況速報A版から抜粋。

2. 令和4年作柄状況

全国

ア. 農林水産省が令和4年12月9日に公表した全国の作付面積（主食用）は、1,251千ha（前年差▲52千ha、前年比▲4.0%）となっています。

これは、主食用米の需給緩和の影響を受け、全国的に飼料用米を中心に作付転換が進んだこと等が要因と考えられます。

イ. 作況指数は「100」となり、予想収穫量（主食用）は6,701千トン（前年差▲306千トン、前年比▲4.4%）となっています。これは、全国の作柄は平年並みとなっているものの、生産面積が大幅に減少したためです。

滋賀県

ア. 本県の令和4年産の作付面積（主食用）は、27,700ha（前年差▲1,200ha、前年比▲4.2%）となっています。なお、滋賀県農業再生協議会で設定した生産目標からは▲755haとなっています。

イ. 作況指数は「101」となり、予想収穫量（主食用）は144,900トン（前年差▲5,100トン、前年比▲3.4%）となっています。

3. 令和5年産の需給動向

ア. 農水省は、令和4年10月20日に示した需給見通しにおいて、令和5年産主食用米生産量を令和4年産同程度（669万トン）と仮定した場合、令和6年6月末民間在庫数量は180～186万トンとなり需給改善が見通されると公表しました。

しかしながら、令和5年産の作付動向やコロナ禍からの需要回復がどこまで進むか等が不透明なため、今後の動向を注視する必要があります。

図表4. 需給見通し（令和4年10月20日時点）

単位：万トン

		農林水産省 令和4年10月20日 基本指針
令和4年6月末民間在庫量	A	218
令和4年産主食用米等生産量	B	670
令和4／5年主食用米等供給量計	C=A+B	888
令和4／5年主食用米需要量	D	691～697
令和5年6月末民間在庫量	E=C-D	191～197
令和5年産主食用米等生産量	F	669
令和5／6年主食用米等供給量計	G=E+F	860～866
令和5／6年主食用米需要量	H	680
令和6年6月末民間在庫量	I=G-H	180～186

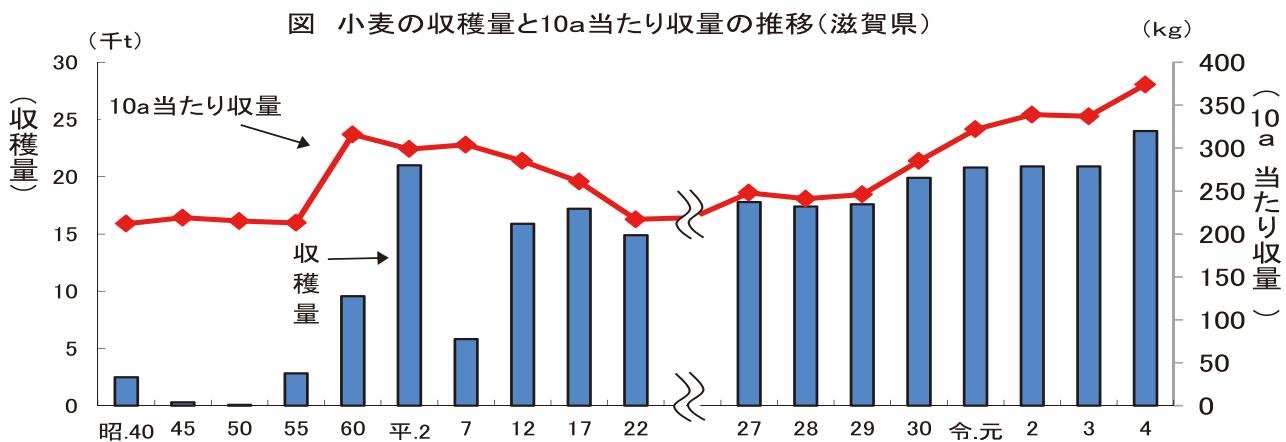
※ラウンドの関係で合計が一致しない場合がある

令和4年産 小麦の収穫量（概数値）

－滋賀県の小麦の収穫量は、前年産よりも増加－

近畿農政局滋賀県拠点

図 小麦の収穫量と10a当たり収量の推移(滋賀県)



1 全国

全国における小麦の収穫量は、98万7,600tで、前年産に比べ10万9,400t(10%)減少した。

これは、北海道において、登熟期の日照不足等により粒肥大が抑制されたことに加え、大雨・強風等による倒伏が発生したためである。

2 滋賀県

滋賀県における小麦の作付面積は、6,430haで、前年産に比べ220ha増加した。

10a当たり収量は、374kgで、前年産に比べ37kg増加した。

収穫量は、2万4,000tで、前年産に比べ3,100t増加した。

表 令和4年産都道府県別小麦の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

全 国 ・ 都 道 府 県	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量
全 国	227,300	434	987,600
北 海 道	130,600	467	609,400
(都 府 県)	96,700	391	378,200
青 森	733	260	1,910
岩 手	3,750	240	9,000
宮 城	994	392	3,900
秋 田	288	334	962
山 形	109	202	220
福 島	432	194	838
茨 城	4,640	268	12,400
栃 木	2,380	365	8,690
群 馬	5,380	416	22,400
埼 玉	5,290	360	19,000
千 葉	739	231	1,710
東 京	12	175	21
神 奈 川	39	233	91
新 潟	118	296	349
富 山	51	248	126
石 川	94	215	202
福 井	135	218	294
山 梨	76	346	263
長 野	2,270	360	8,170
岐 阜	3,490	358	12,500
静 岡	749	245	1,840
愛 知	5,870	511	30,000

全 国 ・ 都 道 府 県	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量
三 重	7,250	332	24,100
滋 賀	6,430	374	24,000
京 都	196	195	382
大 阪	1	117	1
兵 庫	1,710	307	5,250
奈 良	119	303	361
和 歌 山	4	180	7
鳥 取	81	323	262
島 根	143	186	266
岡 山	956	433	4,140
広 島	206	244	503
山 口	1,560	415	6,470
徳 島	73	321	234
香 川	2,360	380	8,970
愛 媛	409	452	1,850
高 知	4	139	6
福 岡	16,500	457	75,400
佐 賀	12,100	469	56,700
長 崎	656	332	2,180
熊 本	5,210	399	20,800
大 分	2,960	371	11,000
宮 崎	120	261	313
鹿 児 島	48	198	95
沖 縄	7	103	7

資料：「令和4年産麦類(子実用)の作付面積及び収穫量」(令和4年11月29日公表、農林水産省大臣官房統計部)

令和4年産 麦の品質評価結果から

滋賀県みらいの農業振興課
水田農業・作物振興係

1. 令和4年産麦の作付状況

本県の令和4年産麦の作付面積は、4麦合計で前年産から340ha増加して8,180haとなり、全国では第5位となりました（農林水産統計令和4年11月29日公表）。

播種期には降水量が少なく、播種作業は順調に進み、出芽・苗立ちは良好となりました。12月下旬から3月上旬まで気温は平年より低く、断続的な降雪（積雪）があり、県北部において根雪となったところでは生育の停滞が見られました。4月には気温が平年より高くなつたことから、開花期は「びわほなみ」で平年より1日遅く、その他の品種では平年より3～4日程度早まりました。一方、5月には気温がやや低く、登熟はゆっくりと進み、成熟期は平年並～5日程度遅くなりましたが、5月下旬～6月中旬にかけて降水量は平年より少なく、収穫作業は順調に行われました。

2. 病害虫の発生状況

県北部の根雪となったところでは、一部ほ場において雪腐病の発生が確認されました。赤かび病について、開花期に合わせた適期防除が実施されましたが、4月下旬～5月中旬の断続的な降雨により、各地で赤かび病の発生が確認されました。その後発表された病害虫発生予察注意報を受け、追加防除が実施されました。

3. 品質評価結果

令和4年産麦では、後期重点施肥技術や多収品種の導入、適切な赤かび病防除等により単収は約373kg/10a（農林水産統計より）と向上し、品質は良好となりました。品質評価結果について、Aランクの割合は全体で91%と高く、1等比率は84.0%と良好でした。一方、品種別では、本県産「ミナミノカオリ」の1等比率は13.1%と、全国同銘柄平均84.6%（「農産物検査結果」令和4年10月31日現在）と比較して低い状況となっています。

表) 令和4年産民間流通麦のランク区分（品質評価）結果

麦種	品種	令和4年産ランク別比率(%)				農産物検査	
		A	B	C	D	数量(t)	1等比率(%)
小麦	農林61号	80	20	0	0	7,023	86.4
	ふくさやか	100	0	0	0	5,041	97.6
	シロガネコムギ	100	0	0	0	676	94.5
	ミナミノカオリ	100	0	0	0	2,154	13.1
	びわほなみ	100	0	0	0	7,940	94.0
六条大麦	ファイバースノウ	71	0	14	2	5,400	90.5
二条大麦	ニューサチホ	0	100	0	0	214	91.8
はだか麦	ゴールデン	0	0	100	0	290	48.9
全 体		91	5	2	0	29,618	84.0

表中の「令和4年産ランク別比率」はJA全農しがのデータを一部改編、「農産物検査」については、農林水産省「令和4年産麦の農産物検査結果（速報値）」（令和4年10月31日現在）に基づく公表値。

「ミナミノカオリ」をはじめとするパン用小麦では、日本めん用小麦に比べて高いタンパク含量が求められるため、栽培において十分な湿害対策と実肥の施用が必要となります。現状のパン用小麦の品質を考慮すると、今後、品種に応じた栽培の実践が不可欠です。

4. 本県産麦の収量・品質向上に向けて

近年、国産小麦について、加工適性等に優れた優良な新品種の導入・普及の進展、消費者の国産志向の高まりを受け、国産小麦を使った商品開発や原料を外国産から国産に切り替える取組が増加しつつあります。本県においては、小麦「びわほなみ」、小粒大麦「ファイバースノウ」等実需者の評価に沿った品種の導入を進めてきたところですが、引き続き播種前契約数量に基づく面積に従って、確実に作付けを行うことが重要です。収量・品質の高位安定へ向け、産地と関係機関が協力し、地域の実情に応じた対策を講じていくことが大切です。

実需者等からは、年産・地域による品質格差の是正や用途に応じた最適な品質が求められており、生産現場において、実需者に評価される麦の栽培に取り組みましょう！



第47回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画コンクール 入賞者決まる

JA滋賀中央会

JA 滋賀中央会は、第 47 回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールを実施し、審査結果を発表しました。今年は、最優秀賞の「特選」には「作文部門」で 9 人、「図画部門」で 7 人が選ばれ、その他に作文部門では入選 18 人、佳作 27 人、図画部門では入選 14 人、佳作 22 人が選ばれました。

同コンクールは、次世代を担う県内の小・中学生を対象に、ごはんやお米をテーマに、食料や農業について考え、理解を深めてもらうことを目的に毎年実施しております。

今年は小・中学校、特別支援学校あわせて 177 校から「作文部門」に 1,408 点、「図画部門」に 1,332 点もの応募をいただきました。

審査員からは、「ごはんやお米に対する『大好き！』という気持ちが溢れていて、見ていて楽しく笑顔になりました」「作品をとおして、家族や仲間と一緒に食べるごはんの時間の楽しさや大切さを感じられました」などの講評をうけました。

各部門入賞者（特選・入選）は次のとおりです。

作文 部門

☆特選

久保貴太朗（草津小1）、首藤一翔（中央小2）、加藤 陽（長等小3）、金沢碧衣（高宮小4）、寺嶋桜会（岩根小5）、梶田萌衣（石山小6）、今中寿音（伊吹山中1）、日光志穂（草津中2）、黒柳芽以（彦根市立西中3）

☆入選

中川汰音（瀬田南小1）、内堀早成江（島小1）、前川稟生（箕作小2）、佐野太規（岩根小2）、中村光（瀬田南小3）、井上 駿（城南小3）、池本和華（綾野小4）、中橋優茉（長浜小4）、住吉夏帆（草津小5）、正村龍之介（長浜南小5）、神谷直人（旭森小6）、大更紗那（八幡小6）、大音陽花（木之本中1）、山本穂迦（瀬田中1）、永嶋優衣（草津中2）、中西莉子（多賀中2）、浦西祐実（守山中3）、岩崎瑛里菜（滋賀大教育附属中3）

図画 部門

☆特選

浅居咲良（日栄小1）、平居祐奈（息長小2）、布施陽那太（大宝西小3）、安井颯汰（蒲生西小4）、奥村藍衣（信楽小5）、南朔次郎（中主小6）、榎本結香（彦根市立西中2）

☆入選

辻光士朗（城陽小1）、上川董子（城西小1）、大熊彪神（貴生川小2）、安部ひより（蒲生西小2）、波多野七瀬（坂本小3）、廣瀬 哲（油日小3）、岡 凜（綾野小4）、北川樹希（鳥居本小4）、吉都紀二瑚（滋賀大教育附属小5）、音嶋優陽（木戸小5）、小笠広翔（びわ北小6）、中川果乃（逢坂小6）、位田涼花（愛東中1）、堤 彪登（永源寺中2）

作文 部門

(特選) たんぼとたいせつなおみず

草津市立草津小学校 1年

久保 貴太郎

ぼくは、はるになると、おじいちゃんとおばあちゃんのたんぼのてつだいを、おとうさんとします。

ぼくがてつだうのは、みんなにおいしいおこめをとどけたいからです。おいしいおこめには、みずとたいようがひつようです。みずのあげかたは、あさがおはみずをうえからあげるのに、おこめのいねはしたからみずをあげるのがふしきです。みずをだいじにしないと、おいしいおこめができません。

たんぼにみずをはこぶために、まわりにはすいろいろがあります。ぼくはすいろをとおってきましたみずがはいったたんぼにはだしではいるのがすきです。なぜかというとつめたくてきもちいいからです。すいろはたんぼにみずをおくるたいせつなやくわりをもっています。

あきになると、たんぼはきんいろになります。ぼくはかまでぎこぎことおこめをかりとののが、きもちがいいからすきです。でもかまは、すこしむずかしいです。

はるとあきは、おてつだいをすると、みんながよろこんでくれます。ぼくは、うれしいです。これからもいっぱいおてつだいをしておいしいおこめをみんなにとどけたいです。

ぼくは、おいしいおこめができるために、おみずをたいせつにします。すいどうのおみずをむだづかいしないで、いらないときはしっかりととめる。すいろやかわにごみやくさをおとさない。ごみひろいもがんばります。そうすることで、もっとおいしいおこめができるとおもいます。

図画 部門

(特選)

「うみでみんなで たべたおひるごはん」



豊郷町立日栄小学校 1年

浅居咲良

(特選)

「自然の中のお米も最高」



彦根市立西中学校 2年

榎本結香

令和4年度 水田農業振興フォーラム

1. 開催の趣旨

主食用米の需要が減少する中、水田農業を基幹とする本県においては、需要に応じた生産や水田の効率的な活用を進め、農業所得の向上を図る必要があります。近年、国産志向の高まりを受け、国産小麦を使った商品開発が増加しています。本県では小麦「びわほなみ」への転換を進めており、実需者等から求められる麦づくりを推進しています。そこで、今年度は、「びわほなみ」に寄せる期待について講演いただき、実需者の求める麦生産への理解を深めるとともに、より一層の生産意欲の向上を図るため、フォーラムを開催します。併せて、令和5年度から一般栽培が始まる近江米の新品種についても紹介させていただきます。

2. 内容

表彰式 令和4年度 近江米食味コンクール表彰

(「みずかがみ」部門および「環境こだわりコシヒカリ」部門)

栽培・経営に役立つ情報も!

講演 滋賀県産小麦「びわほなみ」への期待 (日清製粉株式会社)

話題提供 水稲の生産振興

(近江米新品種「滋賀83号」および「みずかがみ」について)



日時：**令和5年2月4日(土)**

13:30～16:30

場所：野洲文化ホール 大ホール
(野洲市小篠原2142)

対象：県内農業者および関係者等

定員：300名(先着順)

参加：無料(粗品進呈)

主催：近江米振興協会



3. 問い合わせ先

近江米振興協会事務局

TEL. 077-523-3920

もしくは近江米振興協会の各支部
(県農業農村振興事務所農産普及課)
まで



近江米振興協会
ホームページはこちら

感染症対策のお願い マスクを着用してのご来場をお願いします。発熱・咳等の症状があり、体調がすぐれない場合はご来場をお控えください。
緊急事態宣言の発令など当日までの感染状況を踏まえ、開催を中止する場合があります。必ずホームページをご確認ください。

待ってました！近江米新米キャンペーン結果

令和4年産新米がリリースされる9月上旬から、県内および京阪神地域の消費者を主な対象として近江米の販売促進を図り、近江米のブランドイメージの定着化を目的として、近江米購入者にプレゼントキャンペーンを実施しましたところ、全国31都道府県から13,422通の応募をいただきました。

応募者からは、「農薬化学肥料を通常の半分以下で生産されている」「琵琶湖を連想させるブルーのパッケージが目にされます」といった応援メッセージとともに応募をいただきました。12月中旬に抽選会を行い、特別賞のIH炊飯器をはじめ近江牛、近江の地酒、近江米みずかがみ等を当選の方々に会長のメッセージとともにお届けいたしました。

今後も多くの方々に安全安心な美味しい近江米を届けられるよう取り組んで参りますのでよろしくお願ひいたします。



近江米振興協会流通部会

高木部会長とみずかがみんによる抽選

